
仮面ライダー電王 デンライナー学園

漆風神雷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー電王 デンライナー学園

【Nコード】

N8450E

【作者名】

漆風神雷

【あらすじ】

モモタロスたちが未来に帰った後、ミルクディッパーには普通の時間が帰ってきた。しかし、普通の時間は長くは続かなかった。学園に現われたイマジンを倒すため、良太郎は再び剣を取った。言っとくがこの小説は最初から最後までクライマックス（作者のテンション的な意味で）だけ！

プロローグ（前書き）

最初に言うておく。クライマックス刑事の映像特典を見て、思いついたので書いてみました。気軽に読んでくれると幸いです。

プロローグ

野上良太郎は、不運の星の許に生まれてきた。と言っても大げさではないくらい、不運だった。

朝、買い物に行こうと自転車に乗ると、上から植木鉢が落ちてきた。街で買い物をしていると、財布をなくして買い物ができなかった。しかたなくお金を貰おうとミルクディッパーに帰ってくると、三浦に捕まりスーパーカウンセリングを受けさせられた。

良太郎は、いい加減にしてくれないかなと思ったが、三浦の厚意を断ることができなかった。

自分の性格のせいもあり、良太郎は不運だった。不運だったが、不幸ではなかった。

ミルクディッパーは、良太郎の姉、愛理が営んでいる喫茶店だ。店には常に、彼女目当ての男性客が大勢居る。

三浦もその内の一人だ。

相棒（？）の尾崎は珍しくまだ来ていなかった。

「尾崎の居ない今がチャンスだ。」

三浦はブツブツと呟いたが、良太郎も愛理も聞こえていないようだった。

デンライナーの中では、いつものようにモモタロス、ウラタロスが暴れまわっていた。

モモタロスの攻撃を避けるため、ウラタロスは椅子や机の上を跳びまわっている。

「これじゃ亀じゃなくてウサギだね。」

ウラタロスが自分で自分のことを皮肉った。

「うるせえ、つまんねえこと言うんじゃねえ。」

モモタロスが叫びながらウラタロスめがけて突進する。

ウラタロスはそれをヒラリと避ける。

「暴れるんやない。」

キントロスは相変わらず椅子に座り腕を組んで言った。

リュウタロスは横でモモタロスとウラタロスをはやし立てていた。

そんな風にそれぞれの日常が過ぎていつていた。

あのイメージが来るまでは。

再びデンライナーへ

「ここが、デンライナー学園か。」

モモタロス、正式に言えば、良太郎に憑依したモモタロスが言った。

「なんか、名前おかしくない？」

戸惑いから来る、笑い混じりの声で良太郎が呟く。

モモタロスはそんな良太郎の呟きなど気にせず、学校の中へと足を踏み入れていた。

良太郎時間で、遡ること24時間前。

良太郎は、いつもと変わらぬ時間を過ごしていた。それが嬉しいことか悲しいことか良太郎にはわからなかった。

イマジンが居なくなつて、事件が起こることも、戦うこともなくなつたのは嬉しいことだった。

でも、もうモモタロスたちと会うことはできない。一緒に戦うことができない。

そんなことを考えていると、不思議な気分になった。

そんな時、ことがおこつたのはそんな時だった。

「おい良太郎。」

モモタロスの声が聞こえてきた。

良太郎は、どこかにモモタロスが居るのかもしれないと思い、あたりを見回した。

「そんなところに居るわけないだろうが。デンライナーの中から話しかけてるんだよ。」

「え・・・でも、どうやって？」

「オーナーに頼んで、喋れるようにしてもらったんだよ。」

「でも本当に、本当にモモタロスなの？」

「疑り深えなあ。正真正銘本物だよ。」

「僕も居るよ、良太郎。」

今度は、ウラタロスの声がしてくる。

良太郎は、嬉しくてしかたなかった。

「でも、いきなりどうしたの？」

「それが、大変なことに、過去にイマジンが現われたみたいなんだ。」

ウラタロスは、神妙な声で言う。

「イマジンって、カイが消えたときにみんな消えたんじゃない？」

「僕たちは？」

「・・・」

「僕たちは消えてないでしょ？そういうこと。カイが消えたからってイマジンが全部消えるわけじゃないよ。でもわからないのは、なぜ過去に跳んだか。そして誰と契約したイマジンなのかってことなんだよね。」

ウラタロスは語り始めた。

こうなると長くなることを、良太郎は知っていた。

その後も延々とウラタロスは喋り続け、結局良太郎も再びデンライナーに乗ることになったのだ。

「今回のイマジンは高校生と契約したみたいです。」

デンライナーに乗り、みんなとの再会を喜ぶのもつかの間、オーナーが現われて、いやらしい口調で言った。

「そこで、良太郎君には、教師としてその高校に紛れ込んでもらいます。では、よろしくお願いしますよ。」

と、オーナーが差し出してきたのは、1ヶ月前、オーナーに返した時と、何一つ変わらないライダーパスだった。

そして冒頭の部分に至るのだった。

デンライナー学園

「新しくこの学校の教師になった野上良太郎です。まだ慣れていないので、わからないこととかいろいろありますが、よろしくお願いします。」

良太郎は混乱していた。

なぜなら、良太郎は高校を卒業していない。更には、まだ19歳だから、まだ生徒たちとほとんど年齢が変わらない。というよりも同世代なのだ。

「なんでお前がここに居るんだよ。」

席に戻ると、小声で怒るといふ器用な技を使いながら侑斗が話しかけてきた。

「あれ、侑斗。なんでここに居るの？」

「それはこつちの台詞だ。この時間は俺がいた元々の時間なんだからな。」

侑斗は、わけがわからなかった。

イマジンの気配を感じて、やつとの思い出この学園に忍び込んだのに、今度は良太郎が現われたからだ。

「ちよつと考えすぎで頭が混乱してきちゃった。保健室に行ってくるね。」

良太郎は、困ったように微笑みながら侑斗に言った。しかし良太郎は知らなかった、保健室で更なる驚きに出会うことを。

職員室を出て、左に進むと保健室があった。

意識朦朧の中、やつとの思いで保健室の前に着いた良太郎は、保健室のドアに手をかけた。

そして開くと中に居たのは、なんとナオミだった。

「あ、良太郎ちゃんだ。」

ナオミは笑いながら良太郎の許へと走ってくる。

良太郎は急いで保健室を出て、職員室のほうに向き直った。そのまま歩いて、職員室を通り過ぎて、職員室の隣の部屋の前に立ち、そして中に入ってしまった。

「・・・やっぱりか。」

いつの間にか、良太郎にモモタロスが憑依していた。赤い眼が不気味に光った。

「おいおっさん、これはいったいどういうことなんだよ。」

モモタロスは、部屋の中にあつた机に歩み寄り、そこに座っていた、オーナーに掴みかかった。

「どうもこうも、こういうことです。」

オーナーはいつもと変わらない、落ち着いた口調で言った。

モモタロスは、掴んだ手を放した。いつの間にか目は青く光っていた。

「先輩。ちょっと落ち着いて。」

ウラタロスは、いつもの口調で話す。

「うるせえ、勝手に代わるな。」

意識の中でモモタロスが叫ぶ。

ウラタロスもそれに返す、それをモモタロスが返す、さらにウラタロスが返す・・・の繰り返しが始まった。

「ちょっと、モモタロス。それにウラタロスも、落ち着いてよ。」

良太郎は弱弱しく言った。

それでも二人の言い合いは止まる気配を見せない。それどころか勢いが増していた。

「ちょっと、本当にもうやめてよ。」

良太郎は叫んだ。

二人は驚いて言い合いをやめる。

「とりあえず、今はオーナーの話を聞こ？」

良太郎は、冷静さを取り戻して言った。

オーナーの方を向くと、オーナーは不適に微笑んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8450e/>

仮面ライダー電王 デンライナー学園

2010年10月13日15時23分発行